

現代の「貧困」はどのように語られてきたのか

——雑誌記事タイトルの計量テキスト分析を通して——

比較教育社会学コース 田中 祐児

How "Poverty" Has Been Discussed in Modern Japan
—From the Quantitative Text Analysis of Magazine Article Titles—

Yuji TANAKA

The aim of this paper is to clarify the transition of "poverty" discourse in modern Japan since 1986 by quantitative text analysis of magazine article titles.

The temporal differences in the discourse of poverty are examined by correspondence analysis. The discourse is classified into four groups consequently: Group I (from 1986 to 1991 and from 1996 to 2005), Group II (from 1992 to 1995), Group III (from 2006 to 2009), and Group IV (since 2010). As a result of the quantitative text analysis of each period, it is found that each group has different views on poverty. Specifically, poverty in modern Japan has gradually been discussed with seriousness since 2006. Furthermore, these changes of the discourse correspond to those in the relative poverty rate in Japan.

目次

- 1 問題設定
- 2 分析手法と使用するデータ
- 3 基礎的な分析
- 4 各グループにおける貧困語りの分析
 - A グループ I における貧困の語られ方
 - B グループ II における貧困の語られ方
 - C グループ III における貧困の語られ方
 - D グループ IV における貧困の語られ方
- 5 結論と今後の課題

1 問題設定

一億総中流の幻想がバブルによる好況とその崩壊によって失われていった結果、人びとにとって格差の存在がリアルなものになり、日本での貧困が「再発見」された（吉見 2019）。これが現代の貧困に対する一般的な説明である。貧困は戦後一貫して存在し続けていた（岩田 2017）にもかかわらず、それが再発見されることになったのは、やはり貧しさや格差の存在が身近なものに感じられるようになったからであろう。貧しさが再発見され、人びとの関心が集まるにつれて、貧しさに関する語りも同様に生産されることになる。

日本は貧しさについて、本人の責任を追求しやすいとされている（Pew Research Center 2007）。こうした意識や態度は、貧しさに関する語りや文章のなかにも表れるだろう。この点において、以下の新聞投書は象徴的である。

不況だ、格差社会だと、すべてを国のせいにするのはいかがなものだろうか。

一方、教員と公務員で長年頑張ってきた私の両親は、十分過ぎるほどの年金をもうすぐ受け取る。「小さい時から努力して、ちゃんと勉強してきたから」と本人はいう。自分の努力不足を国のせいにするのはもうやめにしませんか。

『朝日新聞』2006.8.12朝刊 オピニオン2面

ここで用いられている論理は自己責任論として整理できるものである。自己責任は「行為を行った本人が、その行為の結果を引き受けること」（種村2007, p.136）として定式化されるものであり、この発想の根底には、「自己決定を行う〈主体〉が、自由意志にもとづいて行動した結果については、その〈主体〉が結果責任を負うべきだというルール」（荻谷 2001, p.180）があるとされている。こうした発想やルールそれ自体はもはや現代における「常識」（稲葉 2008, p.140）となつて

いる。ただしこの概念が責任という語と比べて特異なのは、自身に不利益をもたらすような結果が生じた場合にのみ使用されるということである(石川 2016)。こうした発想は貧困の文脈において機会の平等と結びつき、『機会の平等』の理念を前提とするならば、低い社会的地位についているのは、当人が『努力を怠ったこと』に原因があるといえる。ゆえに、それは努力の結果の『自己責任』である(種村 2007, p.141) などとして否定的な意味合いを伴って表出されることになる。

他方、貧しさを自己責任とする論調が生活保護受給者にとっての負担になっていること(長谷川 2015)や、自己責任の論理を用いることによって、生活保護の支給要件や支給額をより厳しくしようとする立法上の動きが確認されている(石川 2016) ことからわかるように、貧困の自己責任論は日本における社会保障受給へのスティグマ化を強めるとともに、社会保障制度のさらなる弱体化をも招いていると言える。さらに、貧困を自己責任だと捉える論調の危うさや弊害についての指摘もなされており(内藤 2009)、貧困の自己責任論が悪影響を持つことは確からしいと言える。そのため、貧困の自己責任について日米英仏の4ヶ国における貧困の自己責任観について検討した鈴木(2015)や、イギリスの新聞における貧困層の表象を検討した津田(2019)、政治家の発言や専門家による文献をもとに自己責任を強調する言論を検討した石川(2016)らなど、貧困の自己責任について扱ったこれらの先行研究は、学問的のみならず、社会的にも大きな役割を果たすものである。しかしこれらの研究群には、海外を事例にしているためにその知見を日本に持ち込むことには慎重にならざるをえない点、資料を網羅的に収集しているとはいいがたい点などの課題や限界が指摘できる。加えてこれらの研究に共通する最も大きな問題は、貧困そのものの語りの変遷を分析の射程外に置いてきたことに求められる。貧困の語られ方についての全体像があってこそ、自己責任を強調するような語りや社会の側の責任を訴える語りなど、個々の貧困の語られ方の位置が捉えられるようになるはずである。

また、特定の貧困や関連する福祉政策の語られ方を分析した先行研究にも蓄積がある。たとえば荻谷(1995)は貧困による高校への非進学を、元森(2016)は子どもの貧困を、中村(2016)は生活保護パッシングを、それぞれ雑誌記事や日本教職員組合の活動記録などの媒体を用いて分析しているが、これらは特定

のトピックに注目したものであって、全体を包摂する貧困そのものを直接的な射程に含めているわけではない。岩田(2015)は、「子どもの貧困」や「女性の貧困」のように、昨今の細分化された貧困研究が無視している問題について指摘している。つまり「～の貧困」として論じられる問題はいずれも「不安定な社会階層や家族の変化と関連した問題であることは疑いもない」にもかかわらず、『～の貧困』論は、こうした問題のより本質的な見方を回避し、表面をなぞって終わってしまう可能性があるという意味で、貧困論にとっては、あまり生産的な議論にはなりにくい」というのである(pp.79-80)。つまり、「～の貧困」論は「～」に特有な性質を扱う一方、貧困そのものに伴う性質には関心を払わず、それゆえに貧困そのものについての説明は進行しなかったというのである。こうした指摘は貧しさの語られ方に関する研究にも当てはまるだろう。子どもの貧困など個々の貧困が広義での貧困の一部である以上、子どもの貧困に特有な語りの性質もあるだろうが、貧困語り全体に共通する性質もまた分析されなければならないのである。にもかかわらず、貧困そのものについての語られ方を扱った分析はされてこなかったというのが、貧困に関する言説研究の流れである。これらを受けて本稿では、データが十分に蓄積されている1986年以降の日本における、貧困そのものの語られ方についての変遷の輪郭を描くことを目的とする。

2 分析手法と使用するデータ

前章では日本における貧困表象の変遷を検討することが本稿の目的であると述べた。この目的を達成するためにあたって本稿は、貧困や貧乏に言及した日本の雑誌記事のタイトルに対する計量テキスト分析を手法として採用したい。複数の雑誌のうち、特定のイシュー(たとえば原子力)を扱った記事群を分析することは、そのイシューに関して一般的に共有された認識を抽出するのに寄与すると指摘されている(Gasmon & Modigliani 1989)。

計量テキスト分析は「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う方法」(樋口 2014, p.15)と定義され、データ探索や分析の信頼性向上に資するというメリットが挙げられる(樋口 2017)。このような計量テキスト分析の手法を雑誌記事のタイトルに対して採用したものとしては、景山(2002)や松井(2013)がある。タイトルは本文の内容をそのままに反映したものではない

が、ある程度は反映していることが予想されること、本文を網羅的に収集したデータベースはないものの、タイトルを網羅的に収集しているものはある（後述）ことなどから、本稿では貧困について言及した雑誌記事のタイトルを対象とした計量テキスト分析を行うことにする。なお分析には計量テキスト分析のためのフリーソフトウェア「KH Coder」(樋口 2014) を用いる。

次に本稿が用いるデータについて説明する。本稿はデータ収集に際して雑誌記事索引検索データベースである「Web OYA-bunko」を用いる。「Web OYA-bunko」は、日本の約1万種類約200万冊の雑誌に収録された約614万件の記事のタイトルや執筆者、雑誌名を提供しており、「日本で出版されている通俗的な雑誌記事に関して、もっとも包括的なデータベースである」(松井2013, p.98)。ただし「Web OYA-bunko」は、1985年以前の雑誌記事を十分には収録していないという制約があるため、本稿ではそれ以降、すなわち1986年以降の記事のみを扱うことにする。「Web OYA-bunko」において、検索時期を1986年1月1日から2019年4月30日までに、検索ワードを「貧」にして検索を行ったところ、11,914件の雑誌記事を収集することができた。このうち「貧血」や「ボキャ貧」など、貧乏や貧困とは異なる意味で「貧」の字が使われている記事、「貧しい国語力」や「政治の貧困」のように比喩的に用いられている記事、日本国外の事例を扱っている記事など、本稿の目的とは適合的ではない記事を手作業で除去した。その結果全体の47.0%に相当する5,599件が除去され、6,315件が残った。

図1は貧困に関する6,315件の雑誌記事について、その記事数の推移（棒グラフ）と「Web OYA-bunko」に登録された雑誌記事全体に占める貧困記事の割合の推移（折れ線グラフ）を、5年ごとに表したものである。なお右端にある2016年以降の区分は、2019年4月末までのものとなっているため、他の区分よりも1年8ヶ月分期間が短いことに留意せねばならない。図

1によると、0.1%前後で推移していた貧困記事の割合が、2006年以降では0.2%前後にまで増加していることがわかる。これは、「ワーキングプア」の語を広める契機になったNHKの特別番組が2006年に放送されたこと、「子どもの貧困」への社会的関心の高まりの契機になったとされる（佐々木 2019）、『子どもの貧困』(阿部 2008)の出版、芸能人の母親が生活保護を受給していたことに端を発する2012年の生活保護バッシングなどと時期的に符合している。テレビの放送や図書の出版など、他の層の言論空間と呼応して、貧困に関する雑誌記事も増加していったことがわかる。

このような性質をもつ6,315件を用い、以下では分析を行っていく。

3 基礎的な分析

具体的な分析に先駆けて、タイトルに頻出する語の確認を行う。表1は、タイトルで頻繁に用いられる語の上位50件をリストアップしたものである。なお「貧乏」の語が2度リストアップされているが、これはそれぞれの「貧乏」の品詞が異なることに由来している。つまり、2,301回出現している「貧乏」は「形容動詞」として、156回出現している「貧乏」は「サ変名詞」としてそれぞれカウントされている。本稿では貧困の文脈において頻出する50語に注目し、それらの使われ方や語同士の関係性についての時代を通じた変化を追っていくことにする。

頻出語の確認をしたところで次に行うのが、時期のグループ分けである。貧困の語られ方の時代による変化に関心を払う本稿にとって、時期の区分は議論の前提となるものである。ここで採用するのが、2年区切りの時期を変数として用いる対応分析の手法である。対応分析で追加処理を行うと、追加処理に使用した変数の各値による距離の遠近から、それらの相似の程度

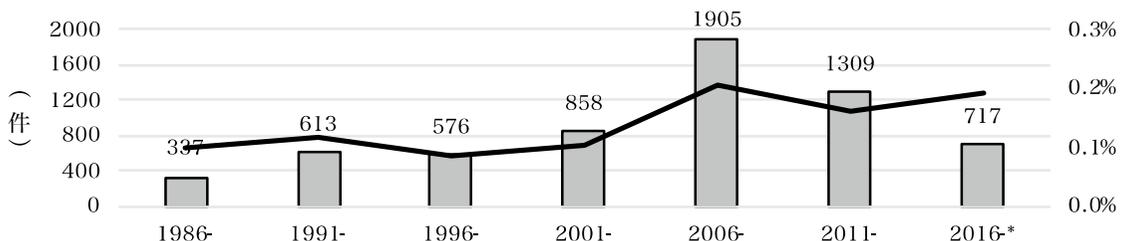


図1：貧困に関する雑誌記事の、記事数と割合の変遷（1986年以降・5年区切り）

表 1 頻出語リスト (上位50語)

抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
貧乏	2,301	格差	391	問題	237	家計	188	語る	153
貧困	2,225	子ども	363	貧	227	生きる	182	豊か	153
日本	752	清貧	345	生活保護	223	ビンボー	177	ルポ	150
時代	616	経済	342	年取	219	差別	167	本	150
生活	593	老後	331	貧乏人	219	女性	166	思想	141
貧しい	579	お金	326	今	212	見る	160	v s	139
金持ち	529	家族	319	現代	208	物語	159	ニッポン	138
他	519	世界	275	女	201	貧乏	156	聞く	137
社会	480	極貧	271	男	201	特集	155	事件	134
人	459	人生	251	東京	200	旅	155	旅行	132

を検討することができる。なお、時期のグループ分けに際しては、リーマンショックなどの貧困に関する重要なイベントを外挿するという手法も考えられる。こうした手法は、特定のイベントによって言説が変化するという仮説を前提とすると同時に、雑誌記事という言説に対する社会の外部性を前提としている。対して本稿は、言説が変化するタイミングを探索的に検討することを目指すとともに、社会による言説への影響を前提とはせず、言説にのみ着目するという立場を取るため、社会的なイベントを外挿するという手段は取らないことにする。

図 2 は、タイトルにおける頻出語の上位50件で作成した空間に、時代を 2 年区切りにしたものを外部変数として追加処理した対応分析の結果である。なお、ここで変数を 2 年区切りにしたのは、1 年区切りの場合、大量の値が空間にプロットされることになり、解釈を妨げてしまうからである。図 2 の結果をもとに、以下の 4 つにグループ分けを行う。1 つ目のグループが第 2 象限に属する区分であり、1986年から1991年までと1996年から2005年までの 2 つから構成されている

(グループ I)。2 つ目のグループが第 3 象限にプロットされている、1992年から1995年までの区分である (グループ II)。3 つ目は、第 1 象限にある2006年から2009年までの区分からなるグループである (グループ III)。そして最後のグループが、第 4 象限に属する2010年から2019年 4 月末までの区分によって構成されるものである (グループ IV)。これら 4 つのグループそれぞれにおける雑誌記事数を整理したものが表 2 である。

表 2 : グループ別雑誌記事数

	記事数	%
グループ I	1,866	29.5%
グループ II	518	8.2%
グループ III	1,595	25.3%
グループ IV	2,336	37.0%
合計	6,315	100.0%

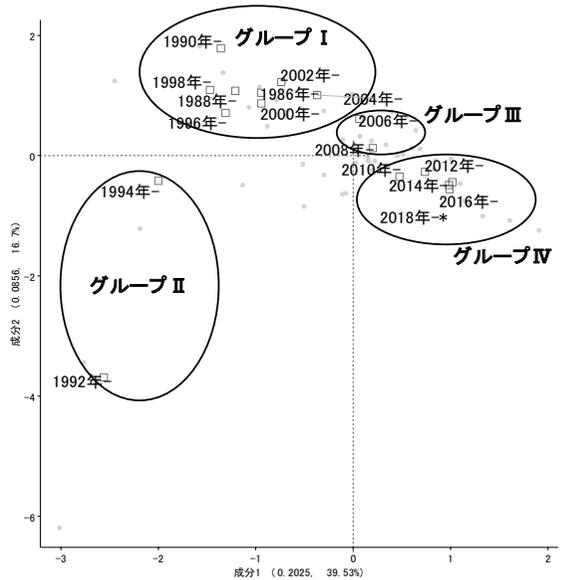


図 2 : 時期を追加処理した対応分析

図2より、4つの区分によって貧困の語られ方が異なっていることが、明らかになった。それでは、それぞれの区分は一体どのようにして貧困を語っていたのだろうか。次章ではこの問いについての分析を行うことにする。

4 各グループにおける貧困語りの分析

本章では、前章で分類された4つの時期それぞれにおける語の共起関係を分析することで、各時期における貧困の語られ方を吟味することにする。共起は、同一の文書のなかに2つの語が同時に用いられていることを指し、共起している語同士には意味的なつながりがあるとされている。なお、各グループにおける語られ方を十分に表現するために、共起ネットワークの作成には当該グループにおける上位50の頻出語を用いることにした。そのため、以下の各節で描かれる共起ネットワークの図(図3から図6まで)に出現している語は、表1のものと完全には符合しないことに留意したい。

A グループIにおける貧困の語られ方

グループIにおける共起関係を図示したのが図3である。共起が生じた語と語の間をエッジと呼ばれる線で結び、エッジ上にはその共起関係の多さを表すJaccard係数を記した。また、語の背後にある円の大きさはその語の用いられた頻度の相対的な多さを表現しており、その円の塗りつぶしの濃淡は、円に付属する語が共起する語の相対的な多寡、すなわち中心性に対応している。以下に続く図4から図6でも、同じスタイルを採用している。

図3で特徴的なのは、「脱出」―「愛」を除く全ての語が1つの塊として関係を結んでいる点である。たとえば、左上の「問題」と右下の「物語」は直接的に共起しているわけではないが、いくつかの語を媒介してつながっている点でユニークである。これは、語の塊がいくつも生成されているグループIIなどには見られないものである。

次に表1において頻出語としてピックアップされている、個別の語を見ていこう。図3において最も中心性が高いのは「金持ち」である。この語は多くの語と共起関係にあるが、とりわけ興味深いのは「貧乏」や「貧乏人」といった対義的な意味にある語と結びついている点である。さらに「金持ち」は同時に、「お金」や「年収」といった、この語に親和的な語とも結びつ

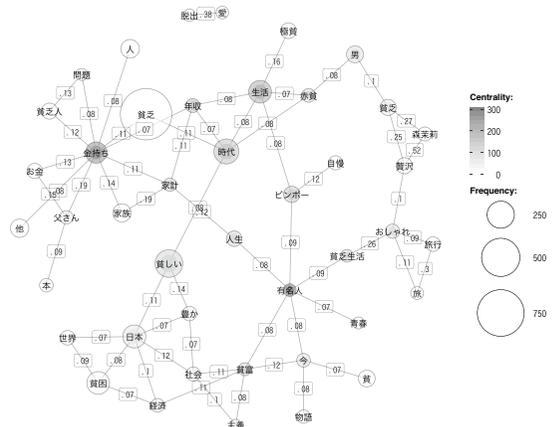


図3：グループIにおける共起関係

いている。これらの関係から想像できるのは、お金や収入のようなパラメーターが外挿されることで貧乏と金持ちが対比されているという構図の存在である。実際にこうした構図を取るものとしては、

「貧乏で終わる人、大金持ちになる人。発想の仕方に大違い」ゼロで始めて億万長者になった23人の意外だらけ

『BIG tomorrow』, 1988年5月号, 青春出版社, 人生¹⁾

節約と運用のコツが身につく! お金を貯める! 楽しく殖やす! 毎日のお金の使い方が将来の運命を決める! 金持ちOLと貧乏OLの生活習慣

『キャズ』, 2005年6月27日号, 扶桑社, タウン・地方

などがある。

また同じく中心性が高いものとして「生活」があり、同様に中心性が高い「時代」や、「極貧」「ピンボー」などと結びついている。こうした結びつきを頻繁に導いているのが、著名人の貧しかった時代を「極貧」や「ピンボー」と表現したうえで、当時の生活を振り返らせるといった構図である。これにはたとえば、

ヌーヴォー先どり解禁宮里藍ちゃん10代初「1億円プレーヤー」の「隠された貧困時代」父・優さんが「銭金」もびっくりの「ピンボー秘話」を本誌に告白

『週刊女性』, 2004年11月30日号, 河出書房→主婦と生活社, 女性週刊誌

がある。また同じく見られるのが、現時点で貧しい生活を送っているものの、それを否定的に捉えていない人物を取り上げるという構図である。

おしゃれに貧乏！から私は貧乏生活が好き！貧乏は、何もかも身軽にしてくれる。

『an・an』, 1990年9月21日号, 平凡出版→マガジンハウス, 女性誌

これらの構図では貧しさは告白できるものであったり、「好き」と積極的に肯定できる対象であったりすることがわかる。

グループIでは「金持ち」の優位性を引き出すものとしての貧しさという構図と同時に、他方で貧しさを肯定的に捉える構図が確認されていた。

B グループIIにおける貧困の語られ方

上記のようなグループIに割り入る形式を取るグループII(1992年から1995年)には、どのような語られ方がなされていたのであろうか。図4をもとに検討していくことにする。図4では図3と違い、語の塊が多くなっている。このことは、使われる語の種類が話題によって大きく異なっていることに由来していると考えられる。

表1に含まれる語に注目したとき、やはり目を引くのは「清貧」と「思想」の共起関係である。こうした共起関係は、グループIIの開始時期である1992年に出版された、中野孝次(1992)によるベストセラー『清貧の思想』が導き出したと解釈できるだろう。この時期には「清貧」の語を多く含んだ記事が多数発行される。そのなかには

最近、面白い本読みましたか 中野孝次さん『清貧の思想』草思社

『クロワッサン』, 1993年1月25日号, 平凡出版→マガジンハウス, 女性誌

のような図書紹介や書評記事もある一方、「清貧」という語のみを取り出した記事も多くある。たとえば

有名人の「清貧時代」ギャラより電車賃のほうが高かった(!?) 新人時代ダウタウン

『FLASH』, 1993年5月18日号, 光文社, 写真週刊誌
ゲレンデおもしろ生態学「清貧スキーヤー」vs「見栄スキーヤー」 ザウスや激安ツアーも登場して、今

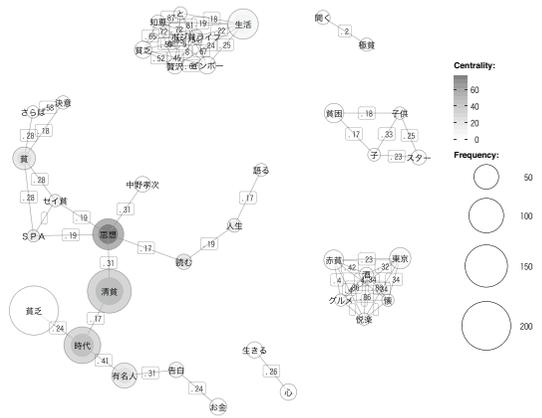


図4：グループIIにおける共起関係

年のゲレンデ状況激変！あなたは、どっち？

『non・no』, 1993年12月5日号, 集英社, 女性誌

という記事がある。ここで気付かされるのは、中野(1992)による『清貧の思想』を離れた文脈で「清貧」の語が使われるとき、そこで取られる構図は、貧しさが赤裸々に告白されていたというグループIの構図とほとんど変わらないということである。

以上よりグループIIでは、「清貧」という語が流行したことによって、グループIで主に用いられていた貧乏という語のプレゼンスは相対的に低下したが、赤裸々に告白されうるものだという点で、貧しさへの意味付けは大きくは変化していなかったと考えられる。また「金持ち」という頻出語が見られないことから、この時期においては富裕層とそうではない層とを対比させようとする構図が下火だったと考えられる。その理由としては、あくまでも推測でしかないが、貧しさをより肯定的に捉えるニュアンスを伴う清貧の語が流行したことによって、貧しさを否定的に捉えることになる対比構造を定めることが難しくなった、というのが挙げられるだろう。

計量テキスト分析でこの問いに対する答えを示すことはできないが、この問いを発掘できたという点にこそ、計量テキスト分析を採用したことのメリットが込められていると言える。

C グループIIIにおける貧困の語られ方

本節ではグループIII、すなわち2006年から2009年までにおける貧困記事を検討していく。前節までと同

様に共起関係を図示したものが図5である。グループⅢにおいて中心性が最も高いのが「お金」であり、頻度が最も多いのが「貧乏」と「貧困」であることが読み取れる。

まずお金について見てみると、「ピンボー」や「金持ち」, 「人」と共起していることがわかる。さらに「金持ち」からは「vs」へのエッジが伸びていることもわかる。ここから、貧しい人や豊かな人について、お金をもとに論じており、さらに「vs」という語を用いることで、より鮮明に対立構造が描かれている傾向がうかがえる。こうした傾向を鮮明に表現したものとしては、

金持ち定年, 貧乏定年 同年収で「没落コースvs極楽コース」の分かれ道50代33万人調査で判明! ※貯蓄ゼロ, 老親介護とパート妻のリストラ, 相続, 他

『プレジデント』, 2007年12月12日号, ダイアモンド・タイム社→プレジデント社, 経済

金持ち社員vs貧乏社員の「マネー習慣」あなたも間違いだらけ? マネー習慣の○と×保険編 あるかないかわからないリスクにお金をかけすぎるな

『THE21』, 2007年12月号, PHP研究所, 経済

という記事が挙げられる。ここで描かれている「vs」を用いる対立構造は、グループⅠにおいて見られていたような「と」で接続されるゆるやかな対比とは異なり、かなり鮮明なものになっていることがわかる。

次に注目するのが、グループⅢにおいて相対的に頻度が高かった「貧乏」と「貧困」の2つの語である。これらは頻度という側面では同様の傾向を示しているが、中心性という側面では趣を異にしている。つまり「貧乏」の語は中心性が高く、5つのノードと共起関係が描画されている一方で、「貧困」の語は「格差」との間にしか共起関係が析出されていない。このことは、「貧乏」が結びつきうるトピックに比べて、「貧困」が結びつきうるトピックの種類が少ないことを意味している。それでは「貧困」の語が「格差」と結びつくときのタイトルはどのような表現が取られているのであろうか。こうしたものにはすでに廃刊になった『小説トリッパー』による

脱貧困への想像力 社会にとって容認できない「貧困」を見据えること ※津村記久子『ポトスライムの舟』と川上未映子『乳と卵』に見る「格差」「貧乏」

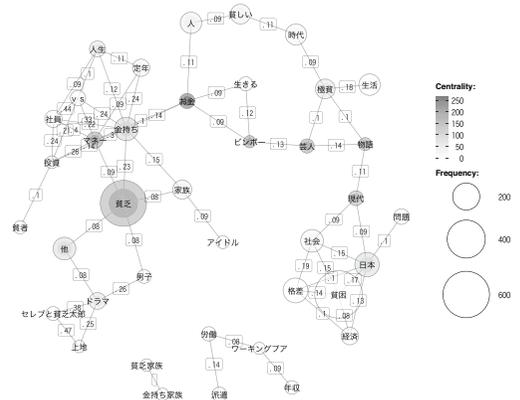


図5：グループⅢにおける共起関係

と「貧困」

『小説トリッパー』, 2009年3月号, 朝日新聞出版, 文学

という雑誌記事がある。ここでは「貧乏」と「貧困」の両方の語が用いられているものの、「貧困」の語には「社会にとって容認できない」という説明が加えられている。つまり、「貧乏」とは違って貧困の語が用いられるとき、そこには社会にとって容認することができないという価値観が持ち込まれているのであることが読み取れる。本節冒頭で「貧困」の語のプレゼンスが上昇していたことを確認したが、このことは、貧しさを社会にとって容認できない問題、つまり社会問題の1つとして捉える気運が高まったことを意味していると解釈できる。

本節での分析からグループⅢでは、貧しさと豊かさが強烈に対比するような構図が出てくるとともに、貧しさを社会問題として捉えるニュアンスを伴う「貧困」の語が多く使われるようになったことがわかった。このうち前者の構図は、豊かさに対比される存在として扱っている点で貧しさを消費の対象としているものであると言えるだろう。貧しさを消費の対象として捉える構図と、貧しさを社会問題として深刻に捉える語りとが同時に広がっていたグループⅢは、貧しさの語られ方が分化していった時期であったと言えるだろう。

D グループⅣにおける貧困の語られ方

最後に本節ではグループⅣ(2010年から2019年4月末)を扱う。グループⅣにおける語の共起ネット

ワークを描画したものが図6である。図6では、「貧困」が最も頻度の高い語になっている。グループIからグループIIIにかけて「貧乏」は一貫して、最も多く(同率含む)使用されていたが、グループIVでは「貧困」が「貧乏」の頻度を上回ることになった。貧しさを社会問題として捉える意味合いが「貧困」の語には伴っているという前節での知見をふまえると、「貧困」の使用頻度が「貧乏」を上回ったことは、貧しさを社会問題として捉える語りがかつてないほどに増加していることを示唆するものである。

このような「貧困」が共起する語を確認してみると、「日本」、「社会」、「経済」、「格差」、「子ども」、「他」となっていることがわかる。ただし以下の引用にあるように、グループIVにおける「他」は、機能語としての側面をほとんど有していない。

人びとの沖縄 沖縄の子どもたち/子どもたちの沖縄 ※子どもを取り巻く環境と基地問題、「沖縄モデル」と呼ばれる官民挙げての子どもの貧困対策、「日本化」がもたらす大きな課題, 他
『世界』, 2018年9月号, 岩波書店, 総合

そこで「他」を除く5つの語について検討してみると、「格差」「社会」という文脈で「子ども」の「貧困」が語られたり、「子ども」の「貧困」が「社会」問題として捉えられたりするという構図と、「日本」や「経済」領域で、「格差」や「貧困」が深刻化しているという構図の2つに大別できることがわかる。このうち「子ども」の「貧困」を軸にする前者としては

ルポ「子どもの貧困」の現実。親の所得減少、ひとり親の増加などを背景に、深刻化する子どもの貧困。社会はこの問題をどう捉えるべきか。
『潮』, 2013年9月号, 潮出版社, 総合
連鎖する貧困 ※子どもの貧困・格差問題, 親の収入の学区ランキング, アンダークラスの実態, 社会の階級化と固定, 貧困対策, 他
『週刊東洋経済』, 2018年4月14日号, 東洋経済新報社, 経済

が挙げられる。また、広義での「貧困」を軸にする後者としては

ニュースディープスロート テロの原因は格差や差別。日本でもその兆候がある? 日本でも格差と貧

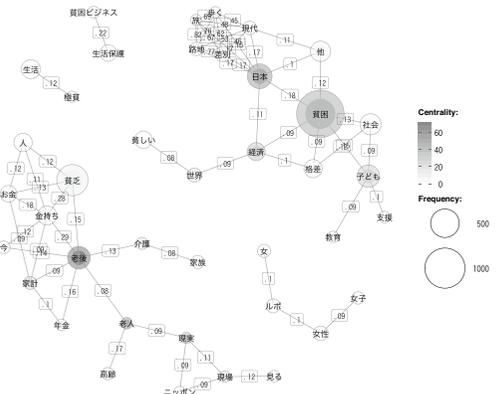


図6：グループIVにおける共起関係

困が拡大し、社会が不安定に ※翻ってシンガポールは、民族融和政策に時間とカネを投じました
『SPA!』, 2015年12月22日号, 扶桑社, 一般週刊誌
SEIRON時評 51回 ※安倍総裁3選の権力構造、経済・金融を無視して政治を語るな、全世帯の三分の一が「ほぼ貧困」に転落、外国の対日工作を無視するな
『正論』, 2018年12月号, サンケイ出版社→サンケイ新聞社→産経新聞社, 総合

といった記事が挙げられる。またどちらの構図であったとしても、「貧困」の語がもつニュアンスに対応して、貧しさを解決されるべき問題として捉えている点で共通している。

社会問題としての貧しさの隆盛と合わせるように、貧しさの対比のされ方も変化している。図6における「貧乏」を見てみると、これまでと同じく「金持ち」と共起しているものの、グループIIIのように「vs」と共起するわけではなくなっていることがわかる。

実際のタイトルを見てみると、下の引用のように「金持ち」と「貧乏」を対比させるなかで「金持ち」の優位性を唱える構図が取られていることがわかる。

特集 今が分かれ目!金持ち老後・貧乏老後「100歳まで安心」最強のマナー哲学入門 ※家族の6大時限爆弾対処法, 老いて住みやすい街, 家計簿改善, 投資商品, 再就職, 老化防止, 終活ほか
『プレジデント』, 2015年11月2日号, ダイアモンド・タイム社→プレジデント社, 経済

こうした構図はグループⅠやグループⅡにおいても確認されていたが、これらとグループⅣとの決定的な違いとして挙げられるのが、富裕層の優位性を必ずしも唱えなくなるということである。

**働かずに大金持ち、働いてもド貧乏「超格差社会」
ニッポンの現実 この国には株の配当だけで年間
3億円以上手にしている人が40人もいる ※富裕層
の実態、高額配当収入ランキング**

『週刊現代』、2016年6月18日号、講談社、一般週刊誌

このタイトルでは「金持ち」と「貧乏」が対比されているものの、そうした分断の原因は格差社会の存在に求められており、本人の過ごし方次第で貧富が分かれるというかつての論調は失われている。社会の側に分断の原因を求めるこのような記事は必ずしも多くはないが、本人に対してのみに帰責先を求めていた従来の論調が揺らぎつつあることは読み取ることができる。

本節での分析よりグループⅣは、広義の貧困であれ子どもの貧困であれ、貧しさは解決されるべき問題として認識されており、また、貧しさと豊かさを対比させる構図は温存されているものの、貧富が分化する理由についての新たな帰責先を見出した時期だと言うことができる。こうした揺らぎが見えるようになった理由については、貧しさを社会問題として捉える風潮が十分に広まったことによって、これとは反対の見方をもつ、個人の行動によって貧富が分かれるという従来の対比構造を持ち出すことが難しくなったのではないかという可能性を提示できるだろう。

5 結論と今後の課題

ここまで、4つのグループを探索的に作成したうえで、それぞれにおける貧しさの語られ方を検討してきた。本章では得られた知見を整理し、次にそれらを統合することで1986年以降における貧しさに関する語りを概観する。さらにそこでは実態としての貧しさにも注目し、語りと実態との対応を確認する。そして最後に先行研究をふまえた考察を通じて、残された課題について述べることにする。

まずグループⅠでは貧しさは赤裸々に語られるものであり、富裕層と貧困層とでの対比はあるもののその程度は緩かった。次にグループⅡでは当時のベストセラーの影響があつてか、貧しさを表す語として「貧

乏」に加えて「清貧」も台頭したが、赤裸々に語られるものという意味づけの変化は見られなかった。さらに富裕層と貧困層とを対比させる構図はほとんど見られなくなっていた。グループⅠに再帰したのちにグループⅢに移ると、「貧困」の語が「格差」という語とともに出現するようになる。ここでは社会問題化の契機が確認されるものの、他方で貧しい人びとと豊かな人びとを「vs」の語で結びつけることで強烈に対比させる構図が台頭するようになったことから、貧しさの語り方が拡散していたことがうかがえた。最後にグループⅣでは「貧困」の語が隆盛になっており、解決されるべき社会問題として認識がより堅固なものになっている。さらにこの時期では富裕層と貧困層とを緩やかに対比させる構図が観察されるが、そこでは貧富の差が生じる理由を個人にのみ求めるという構図には揺らぎが見られていた。

以上のような知見を統合すると以下ようになる。1986年から2005年まででは貧しさは深刻には捉えられておらず、楽観的に語られる側面があつたが、2006年から2010年にかけてではこうした見方に対抗するものとして、貧しさを社会問題として捉える語り台頭してきた。さらに2010年代に入ると、両者の関係は拮抗状態から抜け出し、貧しさを社会にとって容認できない問題としての貧困という言葉で表現する見方が優勢になった。

また、貧しさを表す言葉の趨勢は、「貧乏」(1986年から1991年まで)、「清貧」と「貧乏」(1992年から1995年まで)、「貧乏」(1996年から2005年まで)、「貧乏」と「貧困」(2006年から2010年まで)、「貧困」(2010年以降)という変遷を辿っていた。

このように、言説としての貧しさは少しずつ社会問題としての色彩を帯びていった。それでは実態としての貧しさはいかなる変遷を辿っていたのだろうか。図7は、実態としての貧しさを表すのに最も妥当と思われる相対的貧困率について、国民生活基礎調査の結果をもとに筆者が作成したグラフである。それによれば値の大きな変化は見られないものの、1985年調査から一貫して増加傾向にあることがわかる。貧しさを社会問題として捉える気運が言説レベルで高まったグループⅢ以降に注目してみると、15%前後で推移していたグループⅠ後期からグループⅢでは16%前後へと増加しており、実態レベルでの貧しさも拡大したことが読み取れる。つまり言説と実態は呼応するように、1986年以降一貫して、貧しさは漸次深刻になっていったのである。すでに述べたように本稿は言説内部に注

目する立場を採用しているため、言説と実態との関係²⁾についての踏み込んだ言及は避けるが、ここでみたような対応関係は、本稿で行ってきた分析の妥当性を補強するものであると言うことはできるだろう。

最後に本稿では検討することができなかった2つの課題について、先行研究と併せて考察することで提示したい。1点目について、本稿は貧しさを表す語についての検討を行ったが、それぞれの語がもつ意味論の詳細な検討には取り組んでいない。イギリスにおける貧しさを表す語の分析を行ったLister (2005)によれば、「アンダークラス」の他、「poor」や「poverty」と呼ばれる「Pワード」が貧困層へのスティグマを強化する語としての機能をもつという。日本においても「貧困」「貧乏」「ピンボー」などは似た意味をもつが、それぞれの語がもつイメージは異なっていることは経験的に理解できる。それでは日本語において、一体どのような語が貧しい人びとへのスティグマを煽る語として用いられているのだろうか。特定の語の意味論を検討することは計量テキスト分析の得意分野ではない。そのためこの問いへの回答には、内容分析(Riffe et al. 2014)や概念分析(酒井ほか編2009)を雑誌記事の本文を資料に対して行うことが必要であろう。

2点目について述べる。本稿ではグループⅣが始まった2010年以降、貧しさを社会問題として認識する見方がより決定的になったという知見を得た。このことは、貧しさを個人の問題ではなく、社会が解決すべき問題として捉える気運が高まりを見せつつあることを示唆するものである。しかし他方で石川(2016)は、2012年に芸能人の母親が生活保護を受給していたことが明らかになったのを契機に、親族扶養と併せて、貧困の自己責任論が大きく広がったと指摘している。こうした石川の指摘と本稿がグループⅣにおいて

見出した知見は、矛盾しているように思える。つまり、2010年代に入って貧しさは社会の問題として認識されるようになったにもかかわらず、貧困を自己責任、すなわち個人の問題として処理するような語りが2012年付近で高まっていたというのである。一見すると相容れないようにみえる両者の関係は、以下のような2つの可能性を考慮に入れることで架橋できる。1つ目が、自己責任を強調する語りは、その語り方が一様ではないために、共起ネットワークにおいて十分に捕捉されなかったという可能性であり、2つ目が、そうした語りはタイトルにおいて、自己責任を強調していないかのように擬態している可能性である。後者については、たとえば、貧困当事者の生活の実像を取り上げるといふ趣旨のタイトルを冠しながらも、本文ではかれらの「浪費」や「怠惰さ」を嘲笑・告発する、というスタイルの存在は容易に想像できるものである。いずれの可能性にしても、先程の問いと同様に計量テキスト分析が扱うには不適切なものである。そのためこちらについても、雑誌記事の本文を分析することによって、2010年代以降における貧困を社会の問題と捉える立場と貧困を自己責任と捉える立場とのせめぎ合いを検討することにした。

注

- 1) ここに記されている情報は左から、雑誌名、発行日、発行社、雑誌ジャンルとなっている。なお複数の発行社が並列されている雑誌記事があるが、それは社名変更や倒産に伴う発行社の引き継ぎによるものである。また雑誌ジャンルは、「Web OYA-bunko」による分類を用いた。
- 2) たとえば「言説／実態」という二分法のもと、「言説は、実体(実態)に漸近するための手段ないし道標と捉えられ、言説の真偽や、言説が実体(実態)に与える影響を見積もること」を重要視する見方(赤川 2001, pp.94-95)もあれば、社会(実態)が言説に

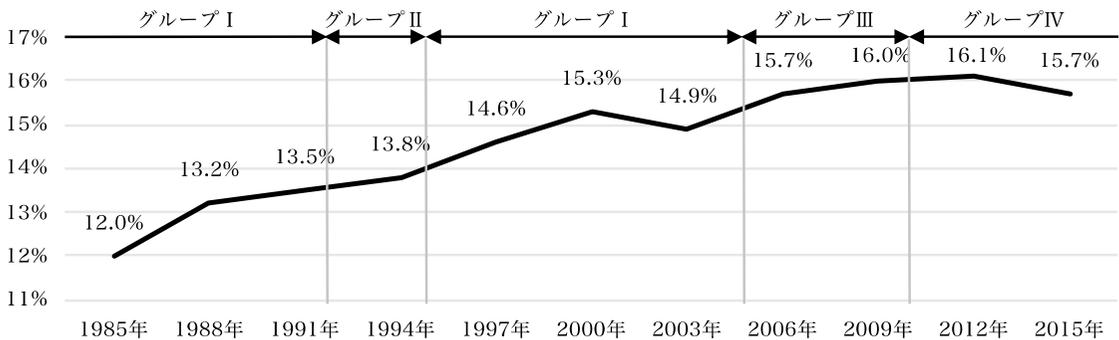


図 7 : 相対的貧困率の推移

影響を与えるという因果関係を措定・重視する見方（仁平 2011, p.19）もある。ただし繰り返しになるが、言説内部の変容に関心を払う本稿にとって『『実態』との対応関係を明らかにする作業は、（中略）副次的な作業でしかない』（赤川 2001, p.95）。その点で図7はあくまでも補足資料に過ぎないと言える。

参考文献

- 阿部彩, 2008, 『子どもの貧困』岩波新書。
- 赤川学, 2001, 「言説分析とその可能性」『理論と方法』16巻, 1号, pp.89-102.
- Gasmon A. William & Modigliani Andre, 1989, "Media Discourse and Public Opinion on Nuclear Power: A Constructionist Approach", *American Journal of Sociology*, Vol.95, No.1, pp.1-37.
- 長谷川裕, 2015, 「新自由主義時代への社会変容の下での生活困難層の子育て・教育、生活」『教育社会学研究』第96集pp.25-45.
- 樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。
- , 2017, 「計量テキスト分析およびKH Coderの利用状況と展望」『社会学評論』第68集, 第3巻, pp.334-350.
- 稲葉一人, 2008, 「法的観点から見た、自己決定」高橋隆雄・八幡英幸編『自己決定論のゆくえ』九州大学出版会, pp.125-157.
- 石川時子, 2016, 「社会福祉における自己責任と反・自己責任言説の諸相」『人文科学研究所報』第40号pp.3-20.
- 岩田正美, 2015, 「貧困とその形態をめぐって」『社会福祉』第56号, pp.79-86.
- , 2017, 『貧困の戦後史』筑摩書房。
- 景山佳代子, 2002, 「KT2コーディングシステムによる雑誌分析」『年報人間科学』第23号第2分冊, pp.213-227.
- 苅谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ』中央公論新社。
- , 2001, 『階層化日本と教育危機』有信堂。
- 小林雄一郎, 2019, 『ことばのデータサイエンス』朝倉書店。
- Lister Ruth, 2005, *Poverty, Polity*. (=2011, 松本伊智朗監訳『貧困とはなにか』明石書店。)
- 松井剛, 2013, 「言語とマーケティング」『組織化学』, Vol.46, No.3, pp.87-99.
- 元森絵理子, 2016, 「大人と子どもが語る『貧困』と『子ども』」『子どもと貧困の戦後史』青弓社, pp.133-162.
- 内藤準, 2009, 「自由と自己責任に基づく秩序の綻び」『理論と方法』Vol.24, No.2, pp.155-175.
- 中村亮太, 2016, 「『生活保護バッシング』のレトリック」『Core Ethics』12巻, pp. 261-274.
- 中野孝次, 1992, 「清貧の思想」文春文庫。
- NHKスペシャル『ワーキングプア』取材班, 2006, 『ワーキングプア』ポプラ社。
- 仁平典宏, 2011, 『ボランティアの誕生と終焉』名古屋大学出版会。
- Pew Research Center, 2007, *WORLD PUBLICS WELCOME GLOBAL TRADE*, Available at: <http://assets.pewresearch.org/wp-content/uploads/sites/2/2007/10/Pew-Global-Attitudes-Report-October-4-2007-REVISED-UPDATED-5-27-14.pdf> [Accessed: 14 September 2019].
- Riffe Daniel, Lacy Stephen & Fico G. Frederick, 2014, *Analyzing Me-*
- dia Messages*, 3rd Edition, Routledge. (=2018, 日野愛郎監訳, 『内容分析の進め方』勁草書房。)
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2009, 『概念分析の社会学』ナカニシヤ出版。
- 佐々木宏, 2019, 「『子どもの貧困ブーム』をふりかえって」松本伊智朗・佐々木宏・鳥山まどか編『教える・学ぶ』明石書店, pp.15-32.
- 鈴木宗徳, 2015, 「道徳による貧困層の分断統治」鈴木宗徳編著『個人化するリスクと社会』勁草書房, pp.221-255.
- 種村剛, 2007, 「『機会の平等』と『自己責任』」『紀要社会学・社会情報学』第17号, pp.135-148.
- 津田正太郎, 2019, 「『彼ら』とは誰か」大賀哲・仁平典宏・山本圭編『共生社会の再構築Ⅱ』法律文化社, pp.34-50.
- 吉見俊哉, 2019, 『平成時代』岩波書店。

(指導教員 仁平典宏准教授)